へ13
3336
6止

べ 13
3336
6

茶義家

雙陸匠物語巻之六

○かちねこ

かくて山人松光ハ道ふて旅のよそひよくまうけさとるもちきゝて法師と見せて頭巾ふかぶりて笈を背ふ負ひてゆくよのつねの旅ぶみとびゝきぶあるゝひあるを頃て人よけゝみて姫宮の仏供しなまぐ苦しき事数まゝぐおそりあたゝ天地の神もたをけよ草まくらとふるき歌おど打誦しおどゝて山を越川を渡りて床ぐるあき埴生の小屋あぐゝある蓮の宿おど母夜をあらゝつゝと かく忍びて行く程ふ道もたちどゝぐ十日あまりを経てかちうおゝく遠江の国ふぞ ぢきふる日ハ西ふかゝむきて海のうへ霧ふとゝりうる中より蜑どもハあさりゝて物かづきて行く笑おひゝる人のあぐぎけく山を下ア来るふ入相の鐘の耳ちゝくひぐきゝるもぐよ夕暮おそとびゝくきいづこ

大正十年八月廿九日
本大學出版部

ふる所どころとゝ侍ゝとて手あゞめつゝ行きくる丹千歳ふりゝくる李乃
めと丹あゝくちう作りゝくる家あり。ゐるゞ中おゞゝき男の。沓たゝく
たくまゝきゞ門よゝち居て松光ゞ法師の生もちせるを見て呼て云くるゝ。
ちゝよりさき二里だりのわどゝあゝ宿りすべき家もあゝざ。夜を
犯ゝてあるゝ世のふゝやむさきをいとひのそぎいとゞめまゝせんらゝせ
めゝとらゝふゝうゝきゝくてよろゝあびらひて入きび叶ひつゝりさてつと見ゝ
て壁あどゝ侍ゞ乾くぞ見西二人ゞ足洗ひをるわど。ゐるゞ。かの袋を奥
の間よりもちゆくとて。ちづゝゝ負て立あゞりておもき袋ふさそゆゝ法僧
い力ある人よあそとのひて。袋をもとびく。あろりのゝ丹西て。薪さゝ
くべけゝ。湯をつくゝ。二人い足のごひて家よ入りて見るよ家ハひろらう
あゝ丹でゝさゝる調度もあく。佛壇ひゝつ。そゝくるのとゝく夜のあゞゝ

見ゝぞ。あるゞ火をとうちて。佛壇よあゝくゝとのさを見ゝび内よあゝくゝ
ちき位牌さゝてあり。ゐるゞ二人ゞ前よ寄りてゐひるゝ三月だゝうゝ
さきゝよ家を焼て後ハ家をつくりゝもみゐ不実ゝゆめ。あゝの月
丹袋をくゝせひひぬよかゝぬ事のゝ手ぢきて。ゝびゝきめをのゝ見て
ゐ。かゝゝ和ゝ年ゝさるゝ。他生の縁ゝくゝ僧ゝそゝ。ゝ丹ゝ生のひつゝめ
ど。佛前ゝく。看經ゝてのゝとゝふ松光化をゐゝいさゞゝと殊勝げゝめて
あゝて云くるゝ何事ゝ過去の約束ゝくゝかゝ一宿の法恩蒙りぬるゝ。
阿弥陀佛の導せのふ事ゝゐ。ゝ身ゝうどゝゝけゝゝだゝゐゞゝ庭丹
下りゝく発祈ゝくゝゝそゝぎて位牌のまゝある土の瓶よさゝゝ。松光立
て佛壇の前よりて。あゝゝゝび拜ゝてをりゝゝとより幼時ゝより匠
の道のゝちゝゝひゝく。一ゝをゞ丹ゝゝゝ

義あるべき事を見てゝ事あり。たゞあるべきふ。あやしき事とおもひて口のうち
ゝ何事とも志をぬきをぶつくとはたぶきの山人いをうしきを会ゞて
あるべきに向ひあるゝ。松光をりゝ声をあげて唐国人の寝言のゝゝんやう
ある。聞てくべゝもあゝぬ事をのゝどあるゝいまゝ心もつゞて立て弘拙
の。まうけあるべき。あるゝ食膳をきをゝて。のゞ字ゝやせゝのゝだ。松光看経
やめて。おあゝよ来ゝふゝとろより金撓とり出く。飯を盛りてはゝとけ丹
ふゝゝせんゝとひく奥よりもちゆきて笠の戸をひゝき。雑宮よゝあゝせゝゝち
かりて。膳ふつきて喰ふ所僧いのゞくふ任持ゝるゝと宜べき松光口より出る
まゝ出て。鞍馬寺と巻ふ。鞍馬いのゞ出の法坊あくれと宜べき松光さ出る
坊ゆてゆゝねゞ。名もはゝきゞゝとのふ。あるゞ。のゞで名のおきに法坊やはゝん。
戯きてのゝふゝとゝゝのふ松光汗よりてをゝゞ法山を鞍馬と呼

ゆゝゝ故よゝ。ある事あてゆやゝのふ松光。くゝ馬ゝちゞけゆを。物ゆくは
ゝのひく巻ゝもゞゝあゞ山人も手ふ汗をあぎりてをり。松光思ひ
あゞくゝゝて。ゞべて樹ゞも高き所ゝ日の景をうけゞはゆゝ。くゝまゝ
呼ゆゝ。我師ハやゝゞゝてゆひきゝ。のひく。汗おゝ掛ふあるゞ法寺の草創
ハのつの代あゝ何人のひくゝゝ出てゆくゝのふふ松光をゝとつゆりて志ゞし
頭ゆかゝゝむけて。掛云ゆるゝ聖徳太子守屋を立ゝて後法建立ゝのひき。
さゞゞゞ仏法最初の法寺あてゆゝのゝだ。あるゞ行ゆゝとつ。ゞゞゞハ四天王寺の
事あをゆゞやゝのゝだ松光四天王寺ゆ鞍馬寺ゆ。ひゝつ匠ゞつゝてゆゝと
いゝふあるゞ。聖さゝゝゝ顔ゝゝ本尊ハ何仏あゝおゝゞゝゝゝ又宜べ松光
鞍馬の本尊をあゝゞ。まゝつよく知ゝてゆりあゞゝ。我ゝ宜ふあゞべゝゝ。
ゆのゝふ事をのゝゞゞゝゝゝんゝ思ひく本尊いくゝゝひく口ごゆるを。せめて

と宮づかの松光ゆう五く者くるを當寺の本尊い定りゝる事あり。阿弥陀を
さるゝある時ゝあり又勢至ゆも仕りゝ。地蔵ゆもさるゝ時ゝよりゝさるゝ
ちほを事ゆゝゝとゝゝだゝあるゝ竹もあくさで同を大きくあゝて。ゆゝるゝて
たゝゝめよりゝ心得ぬ看經のおざゝと思ゝ居る丹我ゆゝたりゝ丹たゝゝそゝ
法ハ法おゝの法師ゆゝあゝゝゝゝのゝゝゝるゝゝゝ立て松光ゝ頭巾引かゝゝゝゝ
駄者ありゝさゝハ一定ねゝくゝあゝゝ。法師ゆ似せゝくゝを欺き物を奪ゝゝゝ
さゝるゝゝゝん今見よゝゝゝゝゝ入口ゝ釣りゝゝる大戯を出ゝゝゝゝゝゝゝ山人
松光ゝ。おゝゝゝゝゝ歯の根ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と見えゝく四九十人ゝゝゝ。手おゝと丹椿ゝ居ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ丹盗人を捕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ねゝくゝい什あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝあげゝゝ什おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝ扨両人を縁ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ。両人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝて合図ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ。遁ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
類ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
笈の戸をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

山人
松光
旅の宿
盗人
髪ぢらん
うきめ
乃ろふ

ゐ志のそざ法袖を顔ふおゝあてゝ泣のふさてを山あくの女ぞう。勾引く
つ主来くる物あゝん永ゝゝを世てゐを世よゝて山人松光を階子ふくゝア
はけく仰向よふさ世く楫の永を口むけくゝかゝもる丹水月口よ入りく
苦ゝさらふゞゝゝゞ姫宮かけ出ふを百姓笘おさゝくうゞかゝ女ゝゝゞ
山人あまりふたゝゞくゝ久主ゞ。ありのまゝふいふゞゝ。志ゞゝゝ。さいあゝゝと
いふ丹又二人を引おゝゝてさゝゝゞ。ゐりの俱よいゝゝ世もる。山くいゝ出んゝ
せゝゞ。ゐあゝをいそゞ。かゝゝゝいよく盗人あゝゝいふゞゝゝ男ゝ久きゞゝや
いをんかゝやいをんゝ男ゝめゞゝゝて口を笑うゞを主ゞ口おりるゝかゞゝを
来つるふたゞゝゞ。猶うゝゝゝいゞゝ百姓笘立かゝりて力よまゝ世くゝ。ちゝ志
久主ゞ。今ゝ山人松光る。息たゝゞくよありてゝゝ。倒主ゐ。かゝる丹姫宮の丙
のる笠の中より。かゝ猫の永出ゝく。あるゞゞ前をゝゝふゝあるゝゝゝ。ゝゝひ

あゝゞぶ。ゐのゝゞ国をつけゝ。我家よかゝる物を嘉ゞ。不思議の猫のさゐよゝ
守ゝゝを主ゞ。猫いさゐゞくゝる。ひゝく人を永ゝゝゝゝゐりゝゝゝ。ゐりゝ
ゞ有頭よ永びゝきゝあゞゝさ主ゞ。主大丹怒ゝ希有の猫ゐゞふるまひゝゐ。
盗人を糺問ゝるゝゐゝゞありゝゐのひゝく佛壇の下より刀ゝり出てゝゝゝを
ぬゝゝく永ゞんゝゝゝる猫をゝゝゝゝゝゝ。木をゝゝる女ゝゐる音ゝゝく猫ゝて
ふゝゝゝまゐゝく永ちゝぬ。あゝゞかの猫のかゝゝ主を取あげ見主ゞ木あて
作りゝゝる物ゐゝく腹の中ふゐふさゝ車ゞゝゝゐ。ゐゝゐ作りて入ゝゝあり。あゐち
ゐちゝの猫ゐゝゞ機関をゝゝかゝくゞりゝゝゝゝゝゝ

ぬしゝや作りのびくんしのつぢ。姫宮耳ふしゝめされのびく。あるじが方を見
やりのびく。墨縄を去るりやとのの人だ。あるじ。さんれかの人ちさぐ。ちぐ
家ふ宿りのびて。我又の命救ひし。恩人あるぞのつで名をしも存ずき
しのつぢ。松光むくゝ起あがりて。ちるさ墨縄どの弟子ありさるさあるち。
墨縄ぬしの弟ふくおちちとのふみ。あるじ大みおどろきていうみやのうあと
のつぢ。松光。ちるさ去身師ある人よりもあひく草餅とのふりめちあぢむき。
榛原の名和の金助けし事あるきとのつぢ。ちるじあるて庭よ蕊万二人が
いまゝ引ときて介抱さ山人もやうあく息生ちをあるじ抱きて上座よ
さ名て。湯よ呑よしのびく。さちぐ百姓笠ハ子細ハ去らねじ俄よあるじが
ちゝしちく方人をいちちりつちふを見くもぐ立ちゝて。さちぐ
のある姫宮山人ふさがりはきのびて。ひち身心地ちたしちふあるよりや。

として手足しちて。ちぢさちりのふあるじちるみ恐ちさちり。頭ちをのふ
おつけちく云ちるいさてく思ひちけざる事ふく。ちとぐ所命みも及びやそ
ぢき所ふ思ちさて猫の機関を見く所身のうくを知りや事。よおの当ハさき
ふ所宿ちを呑ちくせちる榛原ぢてふちち師遠平とや者ふくや其おちちや
遠国ち呑りやふおのちぢ留守をちちりやく女めと草餅めがちちびあやも
父を殺さんとたくみてやちを所かちぐの力を以て父ち命を救ちきくや事
仕ちゝ世ちゝちるぢくやちぢ父ち去月の十五日。病まりてやども臨終の節全
も所かちぐの大恩のありがちき事ちを中出くや。おの当ちいぢ出の大恩
身をおきふあるても謝ちなるぢくと常ち心ふかけてやちを其報ハ仕ちぢ
剣ちやまゝ煩ちちなりいとぢき苦痛をちせ呑ちちを極めちる大罪
ふちぢあくありし父ち對して不孝ち上ちあくやぢ。位牌ちの中ちけ所かちく。

無禮の詫をかくとそはたらうまつらめしひさぬ猫をきりしる刀とり
あげ。ゑうて腹はつきとてんとさるを山人松光をあくとりつきて。ひきこ
とぐめ刀めぎとりて。朝ふをさめて。盗賊とうぐひのひつ生だをいあこ
めくるもまとろとりあり。わ〜自害〜めそんふをこ生くもともぐ生てく
ほるべきやうあ〜とさるぐとのさめ仏生だをさうべ什命のかそうふい君を
の法供仕りとの丹庫〜下るべ〜とのふさて百姓どるを呼よせて何事をこう
さ〜めけだ皆あと巻て久りさりぬ。遠平くそ〜きて子細を尋て女一の宮
あっ事をありてかくるいあ〜き山ごつが家ふ志だ〜も法足をとぐめさせのふ
と事かとごけあやかとやこいひてくよろとぶ車挙りあ〜さるふてこも什
猫をあ〜ふせめてい。よくくはるあ加あひ〜る物あるべきをあくあく赤
撥きは事といくだ。堆官まろもちあ〜きて旅路ふ赤めむけだかく物めち来

〜〜とん思ひもよらぬさをさろ〜身ふ赤ふもかへざる鬆ひ〜つを。手ふめもちく生
ふろ〜ふ思てさて鬆の中ふ猫めふ入りてたの〜〜るが。くふのさいをひとろ
成ふ〜ろかく危きを免生ぬるもみふ志生墨縄がたくみの道の奇特
ありとのあ〜だ〜ふあくさよふあき良工ろふとあるじも手赤〜〜きて感じ
ふろを猫あく夜もふのぐと志〜みあけだを人〜立生ん用意さる丹表石
あまとの人音さあり何事ぞと見てあ生だ雷ふ来り百姓どもあ〜
の什團舟さ石馬二三匹引来さく一同丹地ふ伏くは送りの支度仕りてい
とや志山人さろ〜ふ渡ざおの〜だ。あ〜〜遠平いひるを什一村の者ともを
大方我一族ふく曽祖の時より田をひちて。ひとふませつ者どもあれば
一人もそむく者はをさ今日おの生は供仕生だかさろふもは送りの用
意させくはあり。田ま山ごつのあ〜〜ふを車あどもはをねだか〜去

宿りのあるじ
達平猫のかく
くりもとめてより
山人松光をたてま
つる恩人ありて
百姓ともいひつけ
熊宮の品供しく
あづまよ
くぐるぶ

々さとどもおちてゆめさせをゝんとゝいひさま庭ゆおりてさらぐつをきて待居ゝゝり姫宮の法よろまびハ更あり山人も力を添てゝもあげまだ松光ハいさみ立て姫宮の法手をとりて仆廉ゆのせをる山人松光ら馬ゆの上ハ。あらゞい弓矢とりて。ちらゝゆ立ちてあゆむ百姓どゝもらのみゞく

けゝ志み。警言衛ゝてあゆみつまゝるさゆ昨日ゆら事かたゝてゝゝ法ゝ

旅のよそゆひあり。ゞゆ故郷ゝ為ゝんゆら錦ゝ為ゝくゆゝゝいゝゆゝ事も

かくゆゝんと山人をゝゞらゝ上ゝくて衣白ゝゝ引馬野をいそぎゝ

馬ゝゞゝ行せる

○あゞろ車

竹芝が母ら山人を生ゝゝせゆりて後禅九がめゝゆ為ゝ行ら為ゝ墓証明ゆ

路遠ゝゝて山ゝをめゝとの家ゆ為りあて山人が為り来んにを指を折

てゞ待ゝらゝゝる。今日ゆ例のゞゝとく山人ゞゝあゆ。かげ曙あゞ寄りけ

ゝをゝて。都の事をのゝおゆひけゞけゆゝゝあゆ村長ゝをゝぶきゝて入来りて。

さてゝく希有ゆあゆゝき事を申つ今わゞおのゝ上守為ゆ君ゝゝゝゝゆ。

目代の中ゝ上ゝ。都ゆゝく女一の宮法ゆゆく知ゝゝゝゝ

て思ひ給ふは我子山人はみめさゞ生まれたれども人丈高く生まれ心の外なる事や出来ん心實法なればたゞ世にあるまきおおあひらせ給ふ世間村長の伝曲物とそ聞き物なれあいなき事や出来ん名ぐさ思ひとゞろひつおおあゞきてゞ居給ふ物み山人を遠平ふかゝづる事て日数つゝ牛国小着給ふ人あまゝして家より内ゝ人めいゝでなり人ゝはおゝ事て来りのゝ人ゝ事ゝさまざまして家丹ゆくべしとて蕨蘭ゞ清よりゝゝ一人しゝて内り来り給ふ打ゝゝ見なる棹丸も来あひて悦びて御つ事て給れば母ゝ出とさゝゝ喜びて悪あく内り来しゝや。あゝろめゝなりしゝを云てそぶろ丹涙ゝ出。さて さゝ多ゞとかゝゝひうゝて法山人いひろゝを出けるゆおとあゞゝ出ゝ内ゝけゆるべし。よき媒のひて今宵のうち丹妻を呼び

むうゝと考じてれとゝ。母驚きゝて。ゆり来て甚まく俄に妻を迎へんとゝ子細ある事ゝいづくいろある人の娘ぞと尋ねさりよせて宮へで山人さゝをゞ頭かきゝ口どりて詞を出さで棹丸見ゆりて母ゝむひて母人のにおゝろへ知りれをねど俄の妻さゞあ。おゝろ得ぞたゆきくゝけ引かゝとゝゝで山人手をつきて計事に内ゝ尋ぶ媒へつゞひ詞に反吉とありて面目を失ひにあん扨ハ生くゝ世にありかゝゝとゝゝで母さだゝり思ひ定めゝゝんゆを婚姻ハ母ゝさゞとゝその娘と定むるいづとの誰ゞ娘ぞゝゝみ宮で山人頼あゝゝめてゝひ出さで棹丸声をあげて汝ゞ妻とたんとゝゝるハかゝゝゞけあくゝ帝のにゝつゝゝみ深ゝと内ゝえゝゝ女一の宮ゝまゝまさんとゝで山人堰きゆるゞゝゝゝふありてさゝゝゝうゝ棹丸あゝゝある幕取つて走ゝゝゝ丹ゝ走ゝゝゝひゝるハ汝ゞゝゝとおゝよゝ佐門の

竹芝が家は
姫宮入り給ひ
ものを山人が毋
岩の上ぞ
たゝうぐもり
罵る

佐のつき娘を武蔵の国なる清士が奪ひ去り勢多の橋をきり落し東の方へ逃下りしとの街の風説聞きよく竹内治部卿殿の姫宮を誘ひ奉りしふたがふ事あらじ謀逆謀反の輩ハ其罪一族ハ及ぶと雖も我命ハをしからねど老たる母人をさへ殺しなんとさる人畜生ハ

ふ〻ふつふ。かぎりなき帝王の佐むさぶの母〻き山がつの仇として〻こもちろづき馴なりしぶふ。贈ふときこざなるを奪なりて下りしとは言語ふ〻〻る大悪人めと怒る眼ふ涙をうけて〻ちる調のそしぐふも孝養の心切なるをさる兄ふをひきく〻て我なぐ〻あさはし〻〻ぬ行ひまして母兄ふうきめを見せ姫宮をさへあ〻ぬ所ふ〻〻ふ〻なりしあさまを空おそろしめつ〻ふいあ〻と思ふだ仇をきじぐふきり裂て乳ふ行あきふ〻ぐさと額を爪ふおはけてよう〻くとさるり泣ふ〻乳ふ母ふ相さる声の

下ふ。ふまてもかまてもさきの世の不幸なる事ふてあるべしとて世ふたが〻罪人〻〻なりて頸きり〻まて死ぬる子を見そくいうて見てあ〻うんやさきふ紙せかく〻ふ〻〻る山人が皆ふとりはさ所をわぐごえて泣ぢぐ母のちろのひとほしさ胸ふせ所りて。棹尤も幕をさて地ふ倒まそく袖を噛てぞ泣ふる。かりとぐふもまぐざまだ。松光をさきさ母さて行裏をぢつる〻かせて遠平つきそひなりそぐろ〻〻くいさみ立て。庭さきさ裏をおろさせ姫宮の佐ふをとりて笠子ふいぐあひなる山人そそまと見るよう。汗を丸体ふあぐ〻て。壁ふ向ひなり。姫宮ハのぐろふあ面みそ。坐ふつきあ〻ふを母ふ掉尤も〻〻ぐあ手ままて。口を明て見ぬ〻〻。姫宮ハ會釈〻〻ひて〻も恥り〻さふ絹もものひぎで扇かざ〻ておを〻〻まま松光遠平ハ子細を知〻ぬば高砂の

さいさこのとく〻ひぐぎりてさるぐ。母つひ〻ちて。姫宮の佐手をとり。庭の

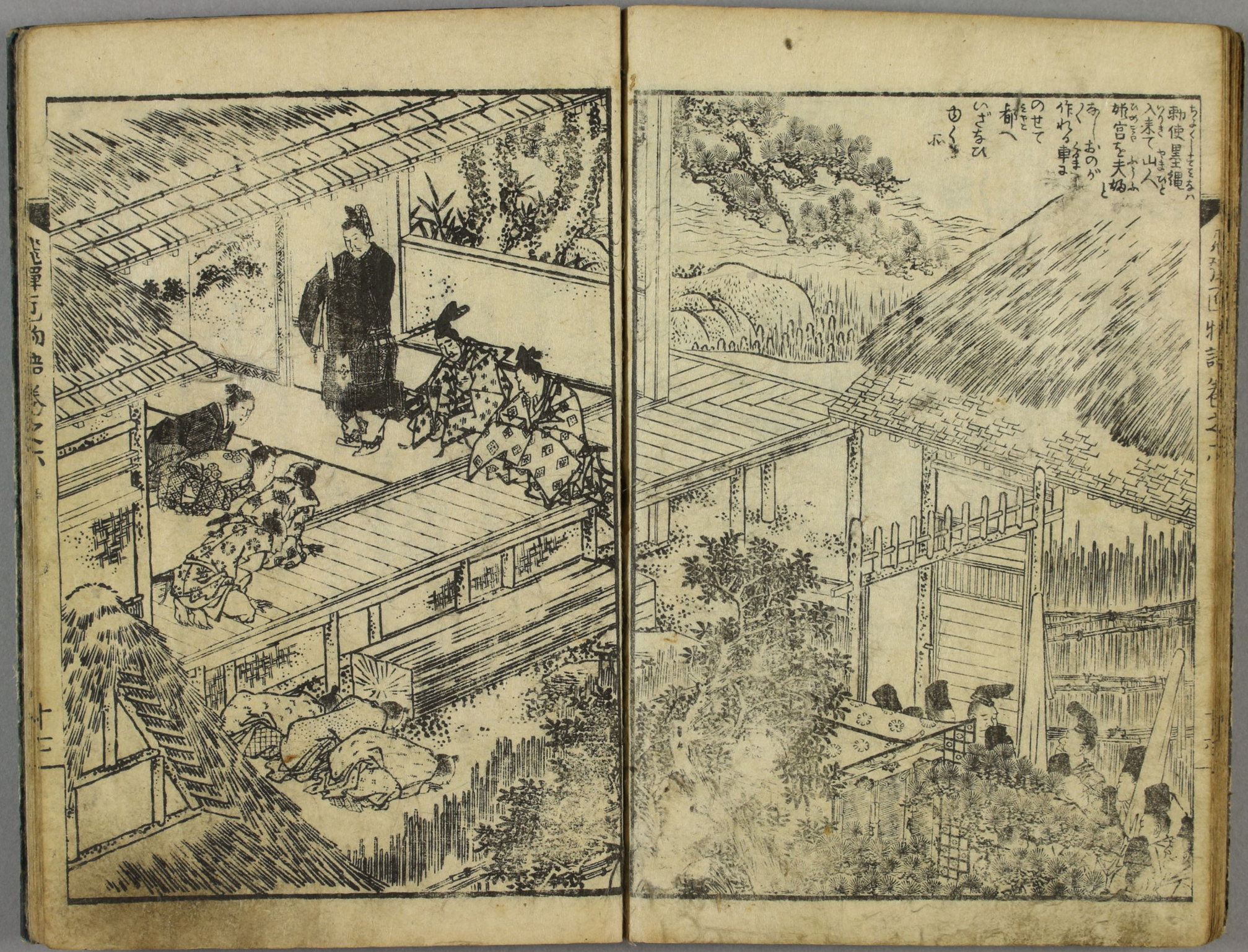
切戸の外へつき出し。あらくろ毋戸をおしあけつ。姫宮おどろかせもひて。まろは山人の妻なるをあどてたゝくおきめをば見さるべしとのゝしをあけ見るゆりて。たゝとひ法門の姫君ゆも仏神の再来ゆも我子の為ゆゑ思魔とも鬼とも夜叉とも。おそらふづき人ゆゑおそをせざるをいとで我家より止めゆゑくせんいづくへ。ありとも法心のまゝゆゑとく立て行きめ。とくとくゆゑ。いひくかけがねゆらるを松光遠平見て思ひ。ゆゑ事かたりて。ささきすぐきゝ。ゆゑひらゆゑ。ゆゑ。ゆゑ姫宮戸をあけらせもひて女の身あるく遠ゆるひゆの旅路ゆあくゞ出て。ひとりあるゝきうゆ見つゝ。ちぎりしゝゆゑ世をかけてゝそひとげゆんの心ぞや。玉家々ゆ家もゆゆゆせん。蓬むぐらゆ理めるしゆ。糸しきゝとめろとめゆゆ。さて法ひてこそ本意あらめしゞゝあけて入るよかゝゝゆたゝきて泣めゝ姫少て頭ゆゆゝてのぞや。

そるゆゆは皆ひゞあとゆとてたらきひくゝゆゆの道ゆかたらゆゆ。あらくゝ父母の詞をまゝざ忍びてみるゝ男まらけてあゞくゝゆゆゆ。聞ゆくゆ名をゝたらんゆゆあるゝゆゆゆ

くる。姫宮佐渡をおさへて。汁家をさしのぞきめをして。まさしくまごの甘あ
畫寝の夢の入まりて物かゝるひゝ家ふたゞをさ。其時見し顔もさあらか
ゝこふかゝりてあり。のゝあまで見し夢たゞひて。うくいかゞ苦しさ
ゝて又うちふして泣めひしゞとしても生て都ふ帰るべき身あらねば。さゝあく
やもかくもあり果んと前ある川を見めふ永あせく見えるまで。死恥
見んいらゝてかりぬべし。汁下つせる渕やあゝん。かゝこふ行く身を投だや
ゝ立あうりめひゝゞさまゞよ此乞や残りそんいくゝゞとあゝ戸のひまより
さゝのぞきめひつくさて此裾をひきかゞげて。川下をさゝて走りのひぬ。
山人ハゝふかゝ丹生てあるゞき身まあゝざゝとて刀とりて死ぬんとさるを。
松光遠平よゝがりつゝくゝとゝ如是ゞ母あるてゝあゝこゝとゝめひ侍
ゝ山人よくゝ生てよ海をとゝり山をまえて。ゝんゞあゝとおさ此方のゝゝさ

あづまふりめひゝゞおさゝあゝてゝ思ひ一めめるゞ行りかゝさゝ此ゝ
さゝあゝのゝゝわゝさめゝゝゞけあさん汁姫が身ふゝりてゝさゝ行えんゝ詞
ゞゝあゝゝゝを生ゝあくゝゝ平ゝて。さくゝやうふゝるまひゝゝゝゝめゝゝが命
のたさけゝゝさゞかゝ。かゞりうおのゝ姫が心を十ゞ一も思ひやゝびあゞゝく
居てゝゝ生よゝて袖をゝゞ生ゞる。松光ゝさゝゝあり
遠平さゝ目おゝのゝゝゞ道理ある松光ゝ立く切戸を明見生ゞ姫宮ハ見え
させめゞゞいゝふいゞくゝ行めひゝんゝと見ゆる向ひより村長走り来りて
思ひよゝゞゞ都よゝ佐勅使ゝゝせゝのゝゝ寺殿介殿をゝゞめゝみゝ佐借
ゝゝく汁家へおゝゝて用意あゝゝひゝく引逃ゝゝゝぬ柄ハ山人ゞ仕業あゝ事と
顯ゝて。かゝめて罪ゞさゝせめゝふあゞゞゝゝゝを逃ゝゝのねゝ母ハさゝ
ゝゞゝゝあゝて出ゝて山人ハためゝゝひて。汁上ゝ逃ゝゝゝて人ゝゝゝ。

牛芝の
百姓ども
動使を
むくへ
まる
不


勅使星縄
入来て山人
旅宮を夫婦
おのが
作れる車に
のせて
都へ
いざなひ
去く

めを見んよりの都ふひうを上て頭きゝ是ん人とのふを堀い出もい是ざ。ひゝさ
さゝゝおゝ生さんとさてるを上さまひあゝそひてある行うゝ表のかゝふ車の
きゝゝる音ゝゝく勅使ふ引そひて守介あゞ入来是ば人ゝあゝて縁を
あり。地ふひ生ふゝて禮をおさ勅使ハのどうよ坐ふつき給ふ山人ハとと母
脇とゞろきて頭をあゞざうつぶゝをう。勅使人ゝを見ありのひて。おのく
恙ふくゝ下りつきゝる事よろとざゝさよゝこの給ふを仰き見是ざ勅使と
あるい猪名部墨縄ふ是ざ人ゝおどろく事大方あゝざいうふ子細とそ
ゝゝめと守りを是ざ墨縄かさねて。勅詔のおもむき拝聽せう是よ山人
宮を誘ひありし事朝家の法おきてそ。ひとゞき刑ふも行ちゝべゝ是
ど。仙縁のひくふ誘ふ宿世の契りあゝと墨縄が好ふ且さいつ仙人
の法義ふ告めひゝとゝ符節をたのゝ是ざ法感大方あゝざ

いゝくゝひ姫宮をありて山人ハ事とふゝて宿縁むあゝくゝぐゝ
とあり。且山人が容貌才学衆ふ秀ゝる事朝家ふも類を見ざよりて
當国の守ふ任ぜゝるゝとの倫言ありと速ゝ是ざ親子三人い義ふ義ふゝ
ゝゝ地ゝて陛ゝゝさゝ人ゝゝどゝふありてひゝさゝゝ是ふあゝて。うは。涙
せきあゝざ。松光遠平い縁のゝゝあゝく小躍ゝゝよろあびをゝゝ。何事も
猪名部氏の一方あゝぬ法事志とみあく手をさるゝあり墨縄ふ
いひゝるい。おの是辞退ゝゝ是ゝど帝の法かゝりをあつく。初めよ本工の頭ふ
任ぜゝ是月ひのゝどふ昇進ゝて守ハ三位の中將をめゝりつゝとふかゝふ
酔ある者を是ゝてゝ是ぬ。聖朝の法時ふゝも逢ゝ是るハ不肖の身の幸あり
ゝゝふ時ふ守介声をゝゝ山人ぬゝい只今より勅使ふそひあり。姫宮と
ゝゝゝゝふ都ふ上りゝひて詔書の法うけヤさるゝ。姫宮をいゞゝ

おとゝ〜まさとゝのびあがりつゝ見まさせぞ人〜ハ目を見あをせをく。めゝ死
うせやまりひつゝんと口ふいをねどゆゝりくふ。ふも胸をぞひゆゝりる。墨縄
をとゝ〜おゝ〜あをてさきのわゞ〜思ひよゝざさゆゑの池よ舟をあげゆひゝ
姫宮のはあきかゝゝく〜拜〜ゆゝまよゝ庭よおゝて門ふゝてゝる陸車乃
福とりのけゝ初めて轂をうつと見えゝふ叶車おの身ゝきゝ〜ゝとく縁の
をゝふ到りゝく止りぬ。さて車のはあ篠おの身ゝさゝりゝく〜巻あげりゝ身を
姫宮はあ轂を出〜のひて。まろゞおゞゝくゝるハみふ墨縄ゞかをくの情よかゝる
命をゝとの結ひてはを手をあをせゆふぞ。めゝゞぎけあきのつの間よいゝふゝて
姫宮をゞ。はあ車ふゆゝ〜事ゝと不審をゝ甚よゝ〜おの身語りやさんと
仕丁どゝゝの中をかきゝけて立生るゝ人あゝり見身ゝ勢多ふゝく別身〜舟主
ゝゝ〜法師右の手ふひゝをえの数を推乃ゝく。をとのゝめゝふ坐をおゝ身ゝ搾ゝ

をゝふよりて思ひよゝうゆ縁くの出乃間ゝゆゝをつをゝとゝあゝをぶ。舟主
いひゝるハおの身勢多ふゝくゝふ別身て後猪名部ぬゝのめゝ丹行きて。
かゝくゝと語りつ身ゞ姫宮の出舟の上甚おゞつゝふゝゝ法師ゝく進つき
をゝりて見えゞくゝ身よはあ守護ゝゝをゝ身ゝとやゝ身ゝて少ゞ甚ゞ盃ゞくはあ
あゝを墓ひゝそぎゝりて来ゝゝ丹さきのわゞ姫宮の車をゝゝて走ゝゝせ
めふふゝ得ゞゝとゝあゝとめよつきて追つきて来ゝゝ丹ゝさゆゑの池よ到ゝめひ
て出舟を沈めひゝあんゝをゝゝをゞてひゞきゝゝとゞめ来ゝゝせてゝるゞゝふゝらく
をる不丹。勅使の通ゝゝせめふゝゝ少てかゝゝゝふ忍びはを墨縄ぬゝ〜ゝをく見
つけめひゝゝとみ丹はあ車よをりて去身ゝまで出借去をりつゝゝてゝも轂廻ゆ
かゝゞぎけふゝさゝかゝゝ老法師ゝゝ骨ふ去ゝゝふ。ありがゝくゝとゝゝむゝをふ身ゝ
ゝ身ゝかりあんゝと空を仰ぎてゝゝゝくゝと泪をゞおゞゝゝゝる。ゞよ世を捨ゝ

人のうく母も息災の道なりハ是ハ此中
の轎ゑとつきておろうあるゑのさ
ふくい嫗よとおぶ〜のたんあるさせめ
手をあてさせて歩泣ぬ姫宮は車より
そ老人ふ志ろだろうきめを見せ
手をとりて泣のふ墨縄その法手をひきをかちて
あとらのとそを志めふ〜ゑ〜いざや山人ぬ〜とめろとめよ叶ハ法車みめさせ
あんおの主都を出るわど手づら作り〜あ〜ろの車ハ婚姻を賀〜あるる
寸志だろうのさ〜げ物あり。かの陪席の隨意車よりあ〜ひて夫婦の人を
のせあるうだ。牛をかゑ〜て叶車おの主とうどきめぐりぬ〜ぐ〜いざく法左
ぬ〜ぐ〜と催〜たう主ぞ国の守介めろとめよ手をはらく法供の人数

まくあくハ途中のわどおぶつうあくやと用意させくひそ主〜くよ〜ぐ
を主ぞ郎嶌たどめあま〜この百姓鳥帽子白丁よそろ〜く入り来て内お
せ法〜ゆあ〜ぐ〜松光遠平棹法ゆめよ法供仕〜んと法車の前後よ
引をひ〜う。舩主法師見よろ志ぐておの主いいとぐき身よ法ぐ法送りも仕り
が〜さ〜志主より叶ハよ一宇を〜て法佛への報恩ふ三昧堂ふあるぐ〜と
いふ〜ゑ叶祠むあ〜かろで後〜たふとき法寺とあろく竹芝寺とよ〜び
ろハ叶由ハよ〜とぞは〜ろ〜る。扨も叶車ろ牛をもかゑ〜人もひろ〜れぐ。
おのづろめづりつ都をさ〜てのぞりろハ不思議とのふふもあまりなく
さ主ぞ墨縄ゑ道よ巧あり〜事ハ千載の志の世ふもかろう傳へのひつ〜
て法弾の匠と稱〜よ〜び宇宙第一の木工あり〜とそかろおひのとり主
まで少志ろぬ者もあろうろかくて〜ハ都ふのぞりつきて敵虜の赤き

次第を奏し給へ。其時分天帝はめとよりふく。はは母は息ふれよろこび大かたおろそ姫宮ふは對面ありて。はきせぬは物語ども。こゝら多かりぬべくなれど。かぎりある世ゝの事いえ書とるべくもあらねば。あらはしていさぎ。掉丸松光遠平おどもとりぐふ官爵給りてその功を賞し給ひる。山人は姫宮とめろともふ。あづまは歸りはきて後国を治めて民をあち生び。おの生を賤くして賢をたつとみ。鰥寡孤獨を扶持し孝子の家ふちをづかゝ至りて甚門ふ旌をしてあるは門前ふ鼓を置て民の愁ある事を聞賞を厚くし罰討をかろくして大ふ仁政を行ひ人生ざ。一國の中ふ盗賊あく路ふく人をおちゝるを拾ざ。百姓は田を讓りて国民父母のごとく志ゝみをづきて。百がゝき国の守よとめであぎ称ゝ。さるいよのつねの守のごとく。任あくとのふ事もあく。生る限り宮ふ住て。ゑん事あく栄ゑ。ゝ。稲主法師は三昧堂ふ籠りて不動尊ふ祈りしあく。尊き往生をぞ遂ゝるゝるふよりて山ゝゝの坂を聖の坂といひあゝ。ゝるとぞ。墨縄は都ふありて。その住所を傳つゝど山人姫宮とひとゝく。齢高くありぬるまで。鶴おとろへざ。土年のはのあとくふぞありゝる。ゝ人みふ百歳ちかく生のびゝるゝ。一日天晴しる日。雲の雲墨縄が家の庭ふたゝびくとゝへゝふ蓬葉ふく逢つる。魯班仙人あゝつゝ生て。月宮造營の出ゝそぎゝりゝのごとて。墨縄が手をとりて雲居島くぞのぞり行ゝる山人のめとふも同日ふ。あまゝ仙人ありゝて山人姫宮を王の齢ふのせ。ふゝつの顆をぞ玉の管ふをさめて。仙樂たりゆふ奏ゝつ。天上へさそのぞり行ゝゝる其後の事は志ゝるざと世ふを語り傳ふゝるとあん

大尾

飛彈匠物語巻之六終

いでやこのやまいは。ものゝつゝふとりそやひ
とのめづらもぶこよ。きうばをおのれゞよこんぬ。
こうやぶゝこゝばさんとうまゞへ。ほゝゑゞんこ。
いのおゞちこゝくちちたゝとぎゝこゝ乃こゝれ
めゝこゝ。ものまゝこゝあぬえゝにうひあ。あこぬ
こゝのゝこゝだけそこゝひこゝんやこゝみ。こゝこて
ふちちゝたこゝまゞちゝをこゝすゝゝ。ゝてちゝゆ
こゝよこゝうゝをゝゝもゝひゝこゝたゝをゝたゝをゝこゝうゝん
乃こゝこゝもゝけゝこゝいゝゝゝゝこゝむゝけゝこゝゝゝきゝぢ
をゝこゝゝもゝのゝこゝこゝこゝいゝゝゝこゝのゝこゝゝゝゝこゝ

えゝこゝゝけゝこゝゝゝゝゝこゝゝゝゝゝゝこゝゝゝゝゝゝこゝ

解毒養童丸

壹包代百銅　半包代五十銅

小兒　たいどく通妙丸

○代世系たいどくつうぢやう　ぢ
ちやうさいかうきうきにより　胎毒
一とちやうの世系ゆえおの爲
きくあるべし

御藥調合本家　東府隱醫　岡田三折製

賣弘店	京都蒴藥師通東洞院	大和屋彦右衛門
賣弘店	大阪堺筋長堀半町南	奈良屋藤五郎
賣弘店	江戸両國横山町二丁目	大阪屋半藏

○小児胎毒はもつて出来たる小児の業にて伝播でなることもあり伝染を用ひく
みとるべき事なり○たゞごと同様に入りたるごとく治療すべし伝染と雖ども全快あるも
難ひ治○疱瘡やうの小児に伝染と雖ひもけがやうそう扱めてかろこれたんとく
かるべきに小児の内伝染と用ひ成べのほいうて重病と大便ひろうたる小児多よ
用ゆべ大便ひろつ直て生まれ伝染はなけれども二月あるいは生まれ
有るべきとうもそこの○たゞごと治もつまで伝染とすれば見ゆきろうはきも
あれど伝染なれども生まれ胎毒の狭毒のやうそつむろうに生まれその狭毒
を解し一夜より後と和らげ小夜中ごろ手ゆて強さろうの日たん
和つとげと通くよひるとうよし食地と強こほてむーけ生るる日○丈胎毒小児方
病の元と出生のほどやく伝染と用ひのちくのうれひと退けすべし

用ひやう

さうざいの小児一歩と十粒ツ一日と三歩ツ二三才より一歩と
十粒ツ日と三歩ツ廿歩ツ小児のこれわざ一日と三歩ツ